

場 長 就 任 の ご あ い さ つ



場 長
きたむら おさむ
北村 修

この4月に、工業試験場長を拝命、着任から3か月間が瞬く間に過ぎました。

私自身は、県庁生活の半分以上を商工行政に携わってまいりましたが、「モノ作り技術」に真正面から深く向きあうのは今回が初めてであり、着任以来、毎日、四苦八苦しながらも、工業試験場の全体業務や研究内容の把握に努めるとともに、最新技術に目を配りつつ、本県の産業支援に工業試験場としての存在感をより発揮するべく決意を新たにしております。

最近は、県内企業の方々にお会いする機会も徐々に増え、皆様からは、「工業試験場には技術面で壁に突き当たった際の相談やクレームのあった製品の試験分析など、駆け込み寺のように迅速に対応してもらっている。」

「工業試験場が開発した技術を導入し、新たな製品開発ができ、これまでお付き合いできなかった大企業ともビジネスができるようになった。」など、感謝の言葉を多く頂き大変うれしく思っております。

一方で、

「敷居がまだまだ高い。小規模な企業の方々にも、もっと利用してもらうように」

「製造業だけでなく、建築業や医療、サービス業など他の産業分野の企業の相談利用や一般県民の皆様も身近に感じられる工業試験場を目指して欲しい」といった、広報・情報発信面での注文や、

「最先端の技術動向に対する感度を一層高め、課題対応型の業務にとどまらず、炭素繊維等の研究に代表されるように、企業に対する開発提案型へと攻めの展開を図って欲しい」

「県内大学や県外の公設試などとの連携を強化し、試験研究ハブとしての機能をさらに高めてほしい」といった期待も多く寄せられております。

工業試験場では、こうした声に少しでも応えられるよう、従来より職員がテーマごとのプロジェクトチームを編成し、日々、企業の皆様からのニーズへの対応策に知恵を絞っております。

今年度に入ってから、先に産業展示館で開催された中小企業技術展の折りには、企業の参画が可能な研究開発の募集説明会を新たに企画開催し、現在、多くの企業から新規の共同研究の問い合わせを頂いております。また、7月には、工業試験場の利用が比較的少ない能登地区、加賀地区で技術移転セミナー（詳しくは本ニュースの6ページをご覧ください）を初めて企画実施することといたしました。

これらに加え、今年度は約400企業の技術ニーズ調査に着手し、「3Dプリンタ」など最近注目されている技術の意識調査も行い、今後、工業試験場が果たすべき役割を遅滞なく探っていきたいと考えております。

最後になりますが、工業試験場の最も大きな財産は「人」です。

おかげさまで工業試験場は、県内中小企業の「試験室・実験室」としての信頼を積み重ね、昨年50周年を迎えました。そして、今年3月、新たな50年の歩みに向けて、職員のひとり一人が、さらなる自己研鑽を重ねて県内企業の発展のために専心努力することを目標に、職員が自発的に行動指針を策定いたしましたので、以下に紹介し、工業試験場に対する皆様の一層のお引き立てを心よりお願いし、新任のご挨拶とさせていただきます。

「工業試験場職員の行動指針」

- 一. 誠心誠意 何事にも真心を込めて取組みます。
- 一. 親切・丁寧 相手にわかりやすく、納得を得るまで応対します。
- 一. 即応・迅速 できる限り速やかに実行します。
- 一. 确实・信頼 确实な情報と信頼性の高いデータを提供します。
- 一. 技術革新 常に最新の技術を取入れることを心がけます。